

# 「あさぢが露」私註

——(二)——

石 埜 敬 子

本稿は、昭和五十三年三月発行跡見学園短期大学紀要第十四集に掲載した拙稿『「あさぢが露」私註——』に続くものである。本来ならば前稿に引き続き早い時期に発表すべきであったが、原本そのものを拝見してからにしたいという思いや諸々の事情で思わぬ時間を置くことになってしまった。ただ、この十年間における『あさぢが露』の研究を概観するに、主題や作者については辛島正雄氏による新鮮な研究があるものの、基礎となる原本の読みや解釈の点では、ほとんど進展がみられていないのが現状である。

すでに指摘されているように、現存する唯一の写本である天理図書館本は欠脱や汚損等により読解不能な箇所が多いが、それに加えて書写者の筆癖や乱暴な誤字の訂正が、この作品の読みを一層困難にしているように思われる。例えば、「おほゆ」「おほす」などの形で頻出する「おほ」の連綿は、一見ただけではとても読めない。浅学の私などは数頁写本を読み進めるなかで、やっとその字体が「お」と「ほ」を組み合わせたものであることを理解した次第であった。また、「ち」

「ひ」「い」「か」「る」「ら」「し」「く」「し」「え」などもまことに誤読を誘い易い筆致であり、一字を取り出しただけでは判断がつかねる。こうした写本の場合は、できるだけ多くの人の目で、何回も読みが試みられる必要があるうし、読みに際しては、前後の文脈を十分に検討して、判読し得る字体の中からもっとも合理的な読みを選びとってゆくことが要求されよう。

原本に多く起因したと思われる古典文庫の翻刻の誤りは、その後大槻修氏や加藤茂氏により大方は訂正されたが、なお疑問とするところもあるように見受けられる。本稿では原本の読みの問題を中心に、特に解釈と関わるいくつかについて指摘したい。ここに取りあげた一つの問題は小さいが、それらを地道に積み重ねることによって、この作品がより正しく読まれ、正当に評価されてゆくことを願っている。

前稿と同様に、問題箇所は天理図書館善本叢書の影印本に示された丁数で示し、本文引用は特にことわらない限り大槻氏の改訂版『あさ

「ぢが露』によった。必要に応じて付した傍書は、大槻氏により原文が文意上、解釈上の理由で整理されていることを示す。また、説明文中「補遺」とあるのは、大槻氏ご自身によって改訂版の修正を試みられた『あさぢが露』補遺』（甲南国文 第二十三号）をさす。なお、現在原本の閲覧は許可されていない。文中で原本という場合、天理図書館善本叢書の複製本によっていることをお断りしておく。

(一) 1オ

物語冒頭、清涼殿に一人佇む帝を描く場面。古典文庫の翻刻本文をあげる。

上はせいりやうてんにひとりたゝすませ給てあはれに御らんしめ  
くらす、をり給なんの御心もあれは

傍線部、大槻氏改訂版も同様に読み、「おり給ひなん」(p 19)と整理された。しかし原本をみるに、「給」の読みは不審。当該箇所前後にみえる「たゝすませ給て」「ななめられさせ給へは」の「給」とは明らかに字体が異なる。私見では「る」と読むべきであろう。ここは讓位を考える帝の心中を表現した一文であるから「おり給ひなん」では自敬表現を考えなくてはならない。「おりある」ならば、「その時の帝もおり給ひ」(宇津保・梅の花笏)、「そのころ、齋院もおり給ひて」(源氏・葵)のように「退位する」の意で用いられているから、「おりあなんの御心もあれば」で十分に文意も通る。

(二) 9オ

二位中将の恋心を知った父関白が中宮と話す場面。帝の退位の意向を語る中宮の会話の一節である。

大納言の典侍の御思ひ、残り世をすさまじく思し召したることい  
まだ絶えぬを (p 31)

古典文庫も傍線部は「御思ひのこりよを」とする。改訂版の読点に従えば、「大納言の典侍の御思ひ」は、「残り世をすさまじく思し召したること」と並立して、「いまだ絶えぬを」にかかる文脈と捉える以外にないが、「残り世」といった表現はいささかなじまないのではないか。今、「御思ひのこりよを」の読みを認めるにしても、「大納言の典侍の御思ひ残り、世を…」の方が自然であるように思われる。

ただ、私は原本のこの箇所を「のこり」と読むことに疑念を持っている。「こり」の字体に無理がある。やや読みにくくはあるが、ここは「のゝち」ではなからうか。それならば、「大納言の典侍の御思ひの後、世をすさまじく思し召したること…」と解することができ、文脈上の問題もない。

(三) 14オ

母御息所の一週忌も過ぎぬうちに二位中将を通わせることになってしまった先坊の姫宮は、早くも夜離れを歎くことになってしまった。

次は姫宮の苦しい心中を語る一文である。

かの御ため暗き道のさまたげにやなるらん。かかるものとしてや、

なべての人にはなびくまじくいひおき給ひしにたがひぬる御心づからぞかし。形見の色をだに改めで、かかる色をそへつる、亡き魂もいかが見給ふらん (P 39)

「かの御ため」とは、亡き母上のために、の意。姫に「なべての人にはなびくまじく」言い置いていったのももちろん故御息所である。その言葉にたがうことになってしまったわけだが、それは誰のせいだと姫は考えているのか。ここは全体が姫の心中思惟として描かれているのであるから、「御心づからぞかし」の敬語に注意すれば、自敬とみない限り、語法的には「御心」は故母上か二位中将の心と解さざるをえない。

原本を通覧すると、「御」「さ(佐)」「は(八)」「わ(和)」がきわめて紛わしい字体であることに気づく。当該箇所「御」は同頁にみえる「御」(2行目「御をもかけ」、7行目「かの御ため」)の書体とは明らかに異なり、入筆部分の墨色や筆の勢いからみて、書き誤ったものを修正した字のように見受けられる。思うに、本来「は」と写すべきところを誤って、無理にその字の上に加筆修正したために「御」とも「は」ともつかない字体になってしまったのではなからうか。「は」ならば、「たがひぬるは心づからぞかし」——母の言葉に反する結果を招いたのもわが心のせいだ、と自省していることになる。姫の苦悩は責任を転嫁しようのない深刻なものなのである。

ところで、「御」と「は」の混同は、40ウ13行目「さりととも」と、しばし御抱へ奉るに」(P 95)や54オ2行目「さて、御心やすく」(P

129)にも言えそうである。意味上からいっても前者は「しばしは抱へ奉るに」、後者は「さては、心やすく」ではないかと考える。

(四) 14ウ

先坊の姫宮を訪れた二位中将は、姫の思いをよそに、夜も明けきらぬ暗い時刻に起き出し、帰ってゆく。

公・私ひまなき御いとまの程を、つきづきしくとりなし給ひて、  
「暮にもかならず」などのため給ひて、「と多この露いまだひす」と、わざとならずうち誦じていで給へば (P 40)

原本を検討しても傍線部は「と多このつゆいまたひす」以外には読めない。そのためか大槻氏は引用句不詳とされたが、これは新撰朗詠集・下・酒に採られた紀齊名の詩句であるろう。

しゆんざにあり  
酒軍在座  
と多このつゆいまだひす  
ほくちまたにまつ  
僕夫待衢  
けいろうのやまあけなむとす  
鶏籠之山欲曙

「兎園」は梁の孝王の庭園の名、「鶏籠山」は中国湖北省にある山で、形が鶏に似ており、夜静かな時には鼓の音がするとの伝説があるという。歓楽の夜が過ぎ払暁を迎えようとする時をうたっていて、早朝に帰ってゆく二位中将が口ずさむにはふさわしい詩句であるが、これに応ずるように詠んだ姫の歌は、「暁の露もろともに消えなばやはかなき夢のうちにまどはで」という悲しみに満ちたものであった。

原本「と多この」「こ」は、あるいは「ン」と記されていたものが書写の過程で間違えられたのかもしれない。

朗詠場面を取りあげたので、ついでに作品中の今一つの朗詠場面に  
ついて一言触れておきたい。50オ、西の京に隠れ住む女君の家の前を  
中納言や三位中将が通り過ぎる場面である。

この主の女も、あやしの門をさしあけさせて、「かれみ奉らせ給  
へ。この君二所、これをつねになん過ぎさせ給ふ（「過ぎさせ給  
ふ」は改訂版では「起きさせ給ひ」であったが、「補遺」で訂正  
された）。み奉れば、思ふこともわすれ侍るなり」などいふに、  
御車の内も光るやうにて、「などの程にて、舟の内、波の上」と  
誦じてすぎ給ひぬるは（P117）

ここで誦されているのは、大槻氏も指摘のように以言の「翠帳紅  
閨 万事之礼法雖異 舟中浪上 一生之歡会是同」（和漢朗詠集・下・  
遊女）であろう。参詣の道すがら口ずさむ詩句としてあまりふさわし  
いとは思われないが、涙にくれる女君との対照をねらったものである  
うか。ところで傍線部であるが、大槻氏は「補遺」において、「これ  
では誦じ難からう。原本は『ひかるやうにて』と連綿しているが、中  
納言たちの乗った車が、女君の居る場所から非常に近い意を含めて、  
『御車の内も光るやうに、手などの程にて』と考えるべきか」と、新  
たな読みを示された。確かに朗誦が「などの程にて、舟の中、波の  
上」ではおかしい。「補遺」に先立っては加藤茂氏が「御車のうちも  
光るやうに、手など入（る）程にて」の案を出されている。氏は古典  
文庫や改訂版が「の」と読む字を「入」と読まれたわけだが、字体か  
らみて賛同しにくい。やはり原本表記は「ひかるやうにてなどの程に

て」と読む以外になさそうである。ただ、大槻氏が言われる意味で  
「手などの程にて」といった用例は管見に入らない。私は前後の文脈  
から「な」は「ま（万）」あるいは「か（可）」の草体からの誤写では  
ないかと考えている。原本読解に際しては安易な改訂は慎まねばなら  
ないが、前者ならば「窓の程にて」、後者ならば「門の程にて」とな  
り、覗き見る女君の前をそれと知らずに朗詠しながら通り過ぎる場面  
としてはふさわしい。建物の構造や物語の常套からいえば後者の可能  
性が大きいと思われるがいかがであろうか。

#### (五) 15オ

たのめ給へる夜な夜なも、かならずおはすることもなきものか  
ら、風うちふくに、御格子・妻戸などのみだるにも（P41）

傍線部は古典文庫も「みたる」と読むが、「みた」の連綿にしては字  
形がつまりすぎている。それに、簾や几帳ならば言いえても、風のた  
めに格子や妻戸が乱れるというのは、情景としても不自然ではあるま  
いか。「みた」の字は3ウ3行目「をとたと」や6オ11行目「なに事」  
の「な」と酷似する。また21ウ1行目「くるしけなる」の「なる」は  
当該箇所と見比べると、ほとんど一致する。この部分、「御格子・妻  
戸などのなるにも」と読みたい。

なお、「な」の字体に関して言えば、17オの『わづらひ給ふも、  
ただ承らぬ身もうらめしく』など書きて」（P46）や、17ウの「御心  
やそらにのみ見えまざるを、ただにふかし侍らじ」（P47）の傍線部

も、それぞれ「な」と「なし」と読める。前者は、「わづらひ給ふもなど、承らぬ身もうらめしく」、後者は「御心やそらにのみ見えまざる。同じに更かし侍らじ」と読んでおきたい。

(六) 15ウ、16オ

病に臥した先坊の姫宮のもとに呼ばれた律師が、願いを受けて早速その日から読経を始める場面である。

「……ただ罪ふかき身かるむばかりに、しづかにおはせん折は、経などよみてきかせ給はば、うれしう」と宣ふに、やがて「けふもよき日に侍る」とて、かかる参りして、夕暮には経よみ給ふに  
(P 42、43)

前半の姫の会話で、「しづかに」は文脈としては「経など読みてきかせ給はば」にかかるゆえ、読点は「しづかに、おはせん折は経などよみてきかせ給はば」がよいか。

さて、傍線部である。古典文庫も「かゝるまいりして」と翻刻するが、表現として落ち着かない。「かかる参り」とは何を指していると考えたらよいのか。私はここを「かちまいりて」、すなわち「加持まゐりて」と読んだらどうかと思っている。原本の「ち」は確かにのびやかさを欠き、「ゝる」の連綿に近い形になっているが、行末に書かれたためであろう。ちなみに18ウ7行目末尾の「ち」や19オ14行目末の「う」も、他の字体に比べると不自然に小さく、同様の傾向を示している。これも書写者の一種の筆癖であろう。また、「まいりて」の「て」

は、古典文庫や改訂版が「して」と読むように、上の部分が伸びているが、これも16ウ16行目行頭に書かれた「とて」の「て」と同様、筆が走ったものとみておきたい。

「加持」に関連してもう一件、60オの次の一文を注意しておきたい。出産に苦しむ女君を通りかかった三位中将が援助する場面である。

せ給ふ (P 147)

阿闍梨ちかく召し入れてうち参り給ふ。御供の人弦打ちなどせさ  
「うち参り」の「う」は、原本では「か」とも読める。「うち参り給ふ」よりも「加持参り給ふ」の方が、この場面の読みとしては合理的である。

(七) 21ウ

先坊の姫亡き後の律師について述べた一文である。

律師は、ありしより御心地もまさり、あさましう思し歎きたりしを、思ひもむなしくなり給ひたるかなしさは、おき所なく思しければ、送り奉りて、帰さより、やがて修行にいでにけり (P 55、56)

文中には「御心地」「思し歎き」「なり給ひ」などの尊敬表現と、「送り奉り」「いでにけり」のように謙讓ないし無敬語の表現が併存する。言うまでもなく敬語待遇は先坊の姫宮であり、無敬語で叙されるのは律師である。この物語においては、律師は最初の登場場面では敬語が

用いられているが、邪心を起こして以後は無敬語となる。姫、律師、二位中将がからむ場面で、動作主を的確に描き分ける必要が生じたからであろう。

さて、今問題となるのは、「おき所なく思しければ」である。紛わしようのない悲しみを感じているのが律師であることは前後の文脈からみても間違いない。そうであるならばなぜここだけに敬語が使われているのか。

一般的に「し(え)」と「え(衣)」は草仮名にした場合、混同されやすい字体である。ことに原本において「おほし」「おほえ」など「おほし」との連綿になると、いよいよ区別がつきにくい。この箇所は「おほし」ではなく「おほえ」と読むべきところだろう。「おほえければ」なら律師を主語としても問題はない。

ちなみに、次の箇所も一考の要がありはしないか。

「のりただが娘のきはにはあらず……」とて、ふとよらまほしくぞ思し給ふ (P 64 26オ)

年さへへだたらんことも、はるかなるわかれめきて思し給へば (P 76 32オ)

「給ふ」に接続していることから、語法的にいつでもいづれも「おほえ」と読むほうが適切かと考える。

(A) 28オ

兵衛大夫の家に方違えをした二位中将は、そこで常磐院の姫宮によ

く似た娘を見つけ、契りを結ぶ。その一夜が明ける場面である。

いそがしきよの有様なれば、人人もやがて起きて、葦あけ(葦戸であるから「あけ」よりも「あげ」がよいか)などして、「中将殿は、など遅くいせせ給ふやらむ。とく明かくなりて」などいひあへり (P 67)

傍線部は古典文庫も「とく」と読んでいるが、字体からみて不審。

「ことゝ」と読める。「ことゝ」は、

「いかがすべき」など言ふ程に、ことと明け果てて(蜻蛉日記・下)

ことと明かくなれば、障子口まで送り給ふ(源氏・帚木)

など用例は多く、意味の上からも問題はない。

「ことと」が出たので、もう一箇所気づいた点に触れておこう。32

ウ、兵衛大夫の女君のもとから妻のいる左大臣邸に朝帰りした場面。

古典文庫の本文をあげる。

あかくなりなんといそかしきこゆれば、こまうちはやめてとのへをはしぬれば、うち多もいり給はてそあかしはて給へることゝひたけて御ちんなどひきつくろひて入給たるに

大槻氏は古典文庫の「御ちん」を「御ひん」の誤読と訂正されたうえで、次のように本文を整理された。

「あかくなりなん」と急がし聞ゆれば、駒うちはやめて、殿へおはしぬれば、『内へも入り給はでぞあかしはて給へること』と、

日たけて、御鬢などひきつくろひて入り給ひたるに (P 76 ~ 77)

この本文では、『内へも…』は誰の心中思惟と考えたらよいのであるか。二位中将では「給はで」「給へる」が具合悪い。また、妻である左大臣の大君が自分のもとに来ない夫に対して思ったことと解して解せなくはないが、作品中で大君の心が具体的に描かれた箇所は他になく、いささか唐突の感を免れない。私はこの部分、「内へも…」以下を地の文とし、「…こと」と「を」こととと読んでどうかと考える。

「あかくなりなん」と急がし聞ゆれば、駒うち早めて殿へおはしぬれば、内へも入り給はでぞ明かし果て給へる。ことと日たけて、御鬢などひきつくろひて入り給ひたるに…

(九)32ウ

前項に引用した二位中将の朝帰りに続く場面、大君の装いを述べた一文である。

上は、この頃の梅の立枝、心もとなき蓄の色、色色重なりたるを着給ひて (p 77)

古典文庫も傍線部を「つほみのいろ色々かさなりたる」とするが、原本によれば、「つほみのいろ色にかさなりたる」と読むことができる。「心もとなき蓄の、色々に重なりたる」でよからう。

(一〇)34オ

女君と二位中将の関係を知った兵衛大夫が、妻である乳母にあびせた怒りの言葉の大筋の解釈については前稿「私註―(一)―」で述べた

が、こまかな読みの問題には触れなかったので、改めて取りあげる。古典文庫が、

またすさひの御ことならんかし、うしとてもやくなかりぬへしと翻刻し、改訂版は、「またすさびの御ことならんかし。憂しとても益なかりぬべし」(p 79)と本文文化している箇所であるが、傍線部の「う」は、原本で見ると、「こ」と読むべき字体である。したがってここは、「またすさびの御ことならん。かしこしとても益なかるべし」と解するのがよい。二位中将にとっては遊びの恋であろう、身分が高い相手であっても何のよいこともないに決まっている、というのが兵衛大夫の言い分なのである。

(二)35ウ

思うにまかせぬ恋に、あれこれ思案する中納言(暮の除目で二位中将は中納言に昇進)の心中を描く場面。

『のりただに召しやいでもし』と思せとも『音なくてひき返してん』こそよからめ』など思いつづくるも (p 82)

「音なくて…よからめ」は、このままでは「黙って戻ってくるのがよからう」となり、前後の文との続きが内容的にすっきりしない。「へ」と「く」の混同は連綿体ではよくおこる。原本の字体をみても「ひきかへし」は「ひきかくし」と読んでよい。中納言は表立って娘の出仕を考える一方で、いっそ盗み出して隠してしまおうかとも考えるのである。後に、娘が行方不明と聞いた時、中納言が、「我こそか

やうにてひき隠して騒がせんとは思ひつれ。いかなるかたへさそはれぬらん」(P 109 46オウ)と歎くのは、この箇所と呼応するものである。

(三) 50ウ〜58ウ

女君を失い心を慰めかねる中納言は、一条大宮あたりの、故中務卿の荒れ果てた屋敷をかいまみる。原本50ウから58ウまでに描かれる一連の話は、物語の本筋からはずれた挿入的なエピソードで、他の場面とはトーンが異なり、それだけに情況の理解がむづかしい。全体的な解釈や意義については、紙数の関係もあるので稿を改めたいが、原本の読みに関してのみ、気づいた点をいくつか記しておく。

(1) そればかりは、いとこのもしからず。少将こそ孫王そんわうの親族しんくなれども (P 123 52オ)

大槻氏は、この「少将」に注して、「初出の人物。後文に、よもやそこが、ここで語られる醜女その人の住む所としらぬ中納言を、案内してかいまみさせる役で出てくる」と説明され、つけ加えて、「もともと原本『われこそ』とも読める」と言われる。古典文庫も「少将」と読む。しかし私見では、字体からも文意上もここは「われこそ」がよい。なお、これと類似する字体が56ウ14行目にみえ、大槻氏はそれに関して、「補遺」において、「古典文庫本は『少将は』の個所を『われは』とする。『研究』『改訂版』とも、それに倣ったが、なお原本を

検討するに、『少将こそそんわうのしそくなれともさやうのなかにたちまじりぬれは』の「少将」と字体が類似している。(中略)一応「少将は」を地の文と考え、『よしなきことをも申侍かな』を、尾張守に對する少将の言葉としておく」と述べて、『改訂版』の自説を訂正されたが、私はここもやはり「われは」と読むのがよいと考える。

先にあげた52オは、中務卿宮の遺児の一人で姉にあたる人物が、縫物をしながら女房たちと妹のことを話題にしている場面である。引用文は、敬語の用い方からみて、女房の一人が、妹を中宮のもとに出仕させたらどうかと提案したのに対する姉の返事と理解される。「われ」はこの場合反射指示代名詞、すなわち具体的には妹をさすのである。「宮仕えは好ましくない。妹本人は中務卿の娘——帝の血筋を引く者であっても、現今の宮仕えでは馬鹿にされ嫌われるのがおちだから」というのが姉の考えなのである。

56ウに関しては、大槻氏の『改訂版』のほうの読みに従いたい。

(2) 例の池山のあたりに、まづ侍らんずるなり (P 126 53オ)

中納言の姿を見失った女房のつぶやきである。古典文庫も「侍らん」とするが、「御らん」の誤読であろう。なお「あたり」は「わたり」とも読める。

(3) 中将の君とて色好める若き人 (P 129 53ウ)

古典文庫、改訂版ともに「中将のきみ」と読むが、女房としての「中



将の君」の名はこの一例のみ。説明なしに人物を登場させるのは物語の書き方として許されるところではあるが、それにしても唐突であり、以後この場面で活躍するのはもっぱら「少将の君」である。また当該箇所「中将」は、他で「中将」と書かれた字体とやや様相を異にするようにも思われる。今、書写者の筆癖を確認するために、「中将」「少将」と記された箇所をこの前後から古典文庫の読みに従ってあげてみよう（前稿でも紹介したが、原本は64ウ19行目と20行目を境として二筆と言われている。したがって厳密には前半部書写者の筆癖ということになる）。

(a) 52才4行目	少将	(b) 53ウ11行目	中将
(c) 53ウ行16目	中将（当該箇所）	(d) 54才7行目	中将
(e) 54才行15目	中将	(f) 55才13行目	中将
(g) 55才15行目	少将	(h) 55ウ4行目	少将
(i) 56才17行目	少将	(j) 56ウ12行目	少将
(k) 58才10行目	中将	(l) 58ウ15行目	中将

それぞれの字体を比較していただきたい。まず(a)は前項で取りあげた「われ」と読むべき箇所。(b)以下のどの字体とも異なることが改めて確認されよう。また、今問題にしている(c)を除けば、(b)(d)(e)(f)(k)(l)を「中将」と読むことに疑問はない。さらに「少将」に関しても(g)(h)(i)については問題がなからう。ただ(j)の字体は(c)に酷似し、「中将」にも「少将」にも読みうる。それゆえ古典文庫が(c)を「中将」と読み(j)を「少将」と読むのは納得しかねる。ただ、前後の文脈をたどれば、

(j)は「少将の君」でなければならず、その意味で古典文庫の(j)の読みは正しいといえる。したがって、帰納法的に考えるなら、(c)もまた「少将」と読んでよいことになる。

私案では、この場面は次のように本文文化されようか。

少将の君とて色好める若き人、かやうの筋は思ひよらぬことにつねといふを、「少将の君の祈り給ひけん山路こそ遅れきこえじと待ちはべりつれ」とのたまへば……

(4)例のかやうのことききすぐし給はぬと、をかしくて、「即時もや侍らん」といへるよし「かくとりなさで、かの人よく尋ねきき給へ。いづくなりけるにかときかまほしき」と宣へば（p 131 54才）

まず「即時」であるが、『改訂版』は原本を「そく事」と読み、「すぐその時に」の意として、保元物語の「即時に召し具して参るべき由」の用例をあげる。この作品の特質の一つに漢語や平安物語にはみかけない特異な語彙が散見することは既に言われているが、それにしても「即時」の語は宮仕え女房の会話としてあまりに不似合であろう。原本を検討するに、「そく事」は「そら事」とも読める。それならば「空言」の意となり、少将の君の発言としても不自然でない。また、下文の「いへる」は、原本の字体から「いへは」と読むべきであろう。里の隣りに隠れ住む女性の噂話に中納言が関心を寄せてきたので、「空言もや侍らん」と少将の君は軽くかわしたところ、中納言が、「よし、

かくとりなきで、かの人よく尋ねき給へ……」と言った場面と解することができる。

(5) 推し当てに仰せ給へど、『まことなりける』とをかしくて、「つひ<sup>(b)</sup>

にかくたがへられ聞えて、いづぢやもとりのいれ給はんとしたりし

こそからかりしか (p 142 58ウ)

まず傍線部(a)。原本58ウ5行目は「おほせ給へ」で改行になるが、注意して見ると「へ」の下に筆がのびている。天理図書館本は近世末に改装補修され、その際、天・地・柱の部分が多少裁断されたと言われている。そのためであろう、行末の文字が明らかに切り取られたと思われる箇所がいくつかある。今問題としている58ウの10行目から14行目にかけての行末文字も下方が裁断されている。したがって「おほせ給へ」の下に一字あった可能性は十分考えられよう。58ウ6行目は行頭から「ことまことなりける…」と読めるから、大槻氏が「仰せ給へど」とするところは、「仰せ給へること」と読むべきかと思われる。

次に(b)は、原本を「つゐに」と読んで校訂されたものだが、書写者の筆癖としてこの連綿体は「つゐに」と読まねばならない字体である(56ウ17行目など)。「いつもこのように人まちがいをされて……」と中納言はいうのである。

(6) 中将は、

『疑はぬこの手の主にこそ』

と、かく宣へば、

『またいかにして思しかかりけん、隈なき御心なりや』

と思ふぞをかしき。(p 143 58ウ)

この場面を大槻氏は「尾張守こそ、まことの中納言だと思っている大君は、恋の歌を、中納言あて送ってきた。ただ筆に巧みな中君の代筆によるその文を、中納言は、側に仕えている『何の中納言の御子の中将いと色深く、くまなき心にてある』者に、あて推量にみせた所、何と彼の想い女であった。もちろん中将は、よもやそれが大君からのものとは思っていない。その筆蹟からして、中君——それはかつて関係があり、いまは間遠になっている——からの懐しい文と思っている。『まこと、この筆蹟の主の女こそ……』と懐しんでいる中将をみて、尾張守は、昨夜から今朝にかけての、あの容貌みにくい大君の深情けを思い出してゾツとしながら、中将も何というものずきなお人よ——とあきれている。こういうズレがまことに面白く描かれている」と解釈鑑賞されている。ズレの面白さについては私も氏のご指摘に賛成である。ただ私はこの場面に関しては少し異なった読み方をしている。

氏のお考えによれば『疑はぬ……』は中将の、『またいかにして……』は尾張守の心中思惟とのことであるから、「宣へば」の主語は当然中将であろう。しかし私が疑問を持つのは、この場面では基本的に中将には敬語が用いられていないのに、なぜここだけに敬語表現がとられているかの点である。また原本「……のぬしにこそ」の「こそ」の字

体が書写者の筆癖を勘案してもなお不自然である。古典文庫も「こそ」と翻刻するが、ここは原本を「かくそ」と読めないだろうか。それが容認されるなら、この場面は次のように解することができる。

中将は、この手の主に（中納言が）かくぞとかくのたまへば（このようにあれこれ弁解めたことをおっしゃるので）、『いかにして（中納言は中君に）思しかかりけん。隈なき御心なりや』と思ふぞ、をかしき。

㊦63ウ

子供の養い親を探し求めていた式部一行は、偶然に三位中将邸の前を通りかかり、稚児は屋敷に引き取られることになった。

大夫の乳母の局におはしまして、「何事いふ者ぞ」とはせ給へば、「これ御覽せさせ給へ。かかる子をしかじか申して、はなちこそや」と聞ゆれば（P 158 63オウウ）

傍線部を古典文庫も「こ」と読むが、表現として無理がある。前稿「私註（一）」でも扱ったが、23ウ7行目や36ウ5行目等にみえる「候」と同様に、ここも「はなち候そや（||放ち候ふぞや）」と解しておきたい。

また、これにすぐ続く三位中将の会話に、

これは、我しかるべき故あるらんと覚ゆるなり（P 158 63ウ）

とある「しかるべき」は、原本を検するに「しるべき」と読める。

「我しるべき故あるらん」で文意も通る。

㊦67ウ

わが子の消息を知った中納言が、母尼上に報告する会話の一節である。

しらでも侍るべきを、男にて侍りける、さやうに申して、ちろぼはさんもさすがなりぬべく侍れば、これにこらせ置き侍らんと思ひ給ふ（P 168）

「こらせ」は語法上不自然。原本で検討するに、傍線「こ」は「ま

い」の誤読と判断される。「参らせ置き侍らん」の意であろう。ただし、その後の「思ひ給ふ」の敬語は不審。「給ふる」または「給へ」ならば理解しやすいが、原本表記は「給ふ」である。自敬表現あるいは主語を母尼上ないし三位中将と考えるべきなのであろうか。後考に譲る。

㊦71ウ

源中将の出家の事情を語る高野尼君の会話の一節。

なにかがしと申して、御隨身、御髻ばかりを、陸奥紙に包みて（P 177）

前述の如く、原本は誤写を訂正するのに、乱暴に二重線で消して傍書したり、誤った文字の上に強引に重ね書きをするなど、誤読を招きやすい箇所が多い。ここもその一例と思われる。原本、「申て」と書き、「て」の上に「す」が重ね書きされている。上下の墨色が異なるので、訂正が別筆であるかもしれず、複製本では判断しかねるが、天理

図書館善本叢書解題で中村忠行氏は、「その墨色・筆跡から判断すれば、訂正はその都度施されたばかりではなく、書写の功を畢えた後、それぞれの筆者によって、一わたり行われたものらしい」と述べておられる。ここは「なにがしと申す御隨身…」と読んでおいてよからう。

(因)72ウ

太秦で奇しくも行きあわせた東国の女と高野の尼が語る場面である。

「この隣には、たれかおはしますにか、いとめでたき男の夜更かし給ひしは。この廿歳ばかりは、東人の声ひがめるをのみ見侍りて、中將殿、故宮などの御さま覚え給へで、あはれにこそ候へ」

といへば (p 179)

中納言も前日太秦に参詣し、「今宵は、かくて侍はせ給ひて、暁いで給ふべきに、人人あまた参りて、局の所なき裏表に、人あるがなかにあけて入れ奉れば」(p 172) という事情で、偶然にも東人や尼の局に隣りあわせていたのであった。都にうとい東人は、隣の公達は誰かと尼に尋ねたのである。傍線部(a)の部分、古典文庫、改訂版ともに原本を「夜更たまひしは」と翻刻するが、「夜部入たまひしは」であろう。行末の「入」の左下が薄れてしまったための誤読かと思われる。

次に傍線(b)であるが、原本は「給て」となっている。大槻氏は文脈上謙讓の「給」と考えて「給へで」と整理されたものと思われる。そ

の場合は、この二十年ばかり東国の人ばかりを見てきて、中將殿や故宮などの御様は忘れてしまい、悲しいことでございます、といった意味になろうか。しかし「給て」は、「給ひて」と読むことも可能である。「給ひて」と読めば敬語の関係から主語は昨夜隣に来あわせた公達になるから、「あの方は中將殿や故宮などの御様子に似通っておられてしみじみと感慨をさそわれます」と解される。この読みでは、「この廿歳……見侍りて」は句点にして、言いさした一文とみた方がよい。

この場合のように原本に「給」とだけあって語尾を補わねばならない時には細心の注意を要する。次のような例もある。

(1) 左の大臣の姫君の御産とて……いといたくわづらひ給ひて、これも若君うまれ給ひぬ (p 170 68オ)

原本の「給て」を「給ひて」と読むか「給はで」と読むかで意味は逆転する。語尾の省略は一般には連用、終止、連体など誤読をおこしにくい場合が多いのだが、書写をくり返してゆく過程で混乱することもあったであろう。今の場合、大君の御産がひどい難産であったなら、夫中納言の対応もそれなりの書かれ方があってしかるべきであろう。情況からみて「給はで」の方が物語としては自然である。

(2) いかに見ききあらはし給ひて、かくまでもたづね給はらん (p 204 84ウ)

原本「給らん」。「給はらん」ならば「たまはる」の未然形に「ん」のついた形、「給ふらん」ならば「給ふ」に現在推量の助動詞「らん」

が接続したことになる。「たづね」が動詞として機能していると考えられるから、「たづね給ふらん」でよいであろう。

以上、原本の読み起因する問題を中心に注解を試みた。書き残したことも多いが、それらについては再び稿を改めたい。なお、原本の読みではないが、改定版が整定本文にあてている漢字で気づいた点を付記しておく。

P 23・2 「思せられながら」は「仰せられながら」か。

P 30・6 「思ひおこりて」は「思ひ驕りて」であろう。

P 38・11 「上手めき」は「上衆めき」がよい。

P 63・3、12 「者」は「物」がよいか。

P 64・3 「まみ」は、目つき、目もと、の意。漢字をあてるなら

「目見」であろう。

p 96・4 「執行」は「誦経」か。

p 138・6 「大願」は、代役の意味で「代官」とも考えられる。

P 159・13 「古事」は「古言」でもよい。

p 179・11 「中将の御子ぞ」は文脈からみて「中将のみこそ」であろう。

p 190・3 「御有様のひなびて、若い眉まいらする」は、辛島氏が「御有様のひなびて若、いま見まいらす」と読まれた<sup>(4)</sup>。私も氏の読みに基づき「御有様の雛びて若(く)、いま見まあらす」と解したい。

p 199・2 「その髪は」は「その昔は」がよいと思われる。

注(1) ① 『浅茅が露』管見——主題性と物語史的位置——(『国語と国文学』昭61・4) ② 『浅茅が露』作者考・序章——藤原為家作者説の仮設——(『語文研究』61号 昭61・6)

(2) 『あさぢが露』の研究「あさぢが露」(改訂版)『あさぢが露』補遺」など。

(3) 『あさぢが露』の本文整理について(『平安文学研究』54輯 昭50・11)

(4) 注(1)①

#### 付記

本稿の校正直前に「あさぢが露」の翻刻本文を含む「鎌倉時代物語集成 第一巻」(市古貞次・三角洋一編 笠間書院)が刊行された。本稿と重複する点も多いが、校正段階での大巾な改稿は不可能であったため、新著に触れえなかったことをおことわりし、お詫びする。(昭63年11月20日記)